

生井久美子著『ルポ 希望の人びと～ここまできた認知症の当事者発信』朝日新聞出版（2017年）

認知症の人は予備群を含めると800万人を上回るという。特に85歳～90歳では半数近くを占め、亡くなる前に大多数の人が認知症になると思われる。死に至る前に、私たちは認知症のステージを経験、通過しなければならないようだ。

こうした中、認知症本人たちによる初の当事者団体「日本認知症ワーキンググループ」（J DWG）が生まれたのが2014年10月で、首相や厚生労働大臣と面談し政策提言を行うようになった。本書ではJ DWGをはじめ、世界の認知症の方々が活動する団体と活動について具体的、かつ詳細に紹介されている。

本書は、世に数多くある認知症を介護、看護する人の視点からの問題提起ではなく、認知症「本人」の視点からこの問題を考えたルポルタージュである。そのため本書では認知症の人が認知症の生活の中で生活のあり方と人生観を語っている。そのキーワードは“希望”である。

アルツハイマーを告白して、偏見を解消するために集会などで語り始める人、健常者の夫に励まされながら国際的な支援ネットワークづくりに参加する人、仕事の手順ノートを作成して仕事を続ける人、「認知症の人と家族の会」の活動を通して認知症への偏見解消と理解促進に生きがいを見いだす人。こうした人びとが繋がり、そして、それを支える人の輪が広がっていく。絶望を語って希望を見いだしていく。「恍惚の人」から「希望の人びと」へ。

本書において明らかになった点は、認知症の人が自尊心を取り戻して人生の質を高め、そして生きる力をつかみ取ることは可能であり、それは本人達にとっても、また社会にとっても重要なことだということである。こうした視点から介護、看護という行為を改めて見直す必要がある。認知症の人は単なる介護、看護の対象ではなく、健常者と変わらない生活、人生を過ごす人だからである。

本書は認知症問題に対する解説書、研究書ではなく、ましてや問題を「整理」「解決」するものではない。もともと認知症の問題は本を一冊読んで解決できる問題ではない。それは哲学や生物学、医学など、“死”の問題を人類は何千年にもわたって考え続けながら、最終的な納得には至っていないのと同じである。

本書の多くの頁には、認知症に立ち向かう認知症の方自身が語る人生の日々と、社会及び自分自身が抱える偏見との戦い、そして、希望が記録されている。こうした本を読むことはいわば調査におけるヒアリングとみることができる。本書の意義は、認知症の問題をどのように考えるべきなのか、そのための糸口となることを認知症の人びとにヒアリングさせて頂いたということである。本書をお薦めするのはこうした視点からである。

なお、本書に認知症問題の最終的解決策を期待することは意味をなさない。実現可能な具体的提案を整理した形で提出しているわけではなく、それは著者の望むところではないからである。読者が紹介された人びとの生き様と数々のエピソードから考えていくべきであろう。（西村 博史）